

第二十二回 関雲長たんとろう単刀たんとうにて会おもむに赴おもむく、曹操かんちゆう漢中かんちゆうの地を平定す

— 単刀会 —

(前回から今回まで)

劉備が劉璋にかわって蜀を領有すると、孫権は、あらためて長沙・零陵・桂陽の荊州南部三郡の返還を、劉備に要求します。しかし、荊州を守っていた関羽は、「兄の劉備がうんといつても私は絶対に返さない」といって全く受け付けようとしません。

そこで魯肅は、関羽を宴会にかこつけておびき出し、荊州返還を承知しなければ、謀殺してしまふ計画をたてます。関羽は、この魯肅の計画を重々承知の上で、行かなければ臆病者とののしられると言ひ放ち、万一に備えて息子の関平を長江岸に待機させたくえで、周倉をはじめ十人近くの屈強のお供を連れて、自らは刀一本だけを持って魯肅の宴会に赴きます。関羽の名場面「単刀赴会」です。

(本文)

(関羽を宴会に招くための)使者は帰還すると魯肅に、関羽が快く承諾し明日必ずやつ

て来ると報告した。

魯肅が呂蒙に「来たらどうしようか」と相談したところ、呂蒙は言った。

「もし軍勢を連れて来たなら、私と甘寧かんねいがそれぞれ一手の軍勢を率いて岸辺に潜伏せんぷくし、石火矢を合図に攻討つてです。もし軍勢を連れて来なかつたなら、庭の裏に五十人の衛兵えいへいをひそませておき、宴会の席上で討ち取りましょう」と手はずが整った。

翌日、魯肅は人をやつて岸辺で見張りをさせた。

やがて辰たつの刻（午前八時）を過ぎたころ、一隻の船が見えて来た。漕ぎ手の水夫が数人乗っているだけ、風になびいてひるがえる紅旗あかはたには、大きな字で「関」と鮮あざややかに記されている。船はしだいに岸に近づくと、関羽は青い頭巾ずきんに緑の戦袍せんぽうを着て、船上に腰を下ろし、その側に周倉しゅうそうが大刀を捧げもち、関西かんせい（函谷関以西）の巨漢が八、九人、それぞれ腰に一振りのの刀をおびている。

魯肅は胸をさわがせながら、関羽を迎え入れた。挨拶がすむと、席に着いて酒を酌くみかわし、魯肅は盃さかずきを挙げて酒を勧めたが、顔をあげて関羽を見ることができなかつた。一方、関羽は泰然自若たいぜんじじやくとして談笑していた。

酒宴たけなわが酣たけなわになつたとき、魯肅は言った。

「一言、將軍に申し上げたいことがあります。どうかお聞きください。以前、皇叔こうしゆくどものには、私を荊州を借用するための保証人とされ、蜀を取ったら返すと約束されました。今、すでに蜀を得られたにもかかわらず、荊州を返されないのは、信義を失われることではないですか」

「これは国家の問題であり、宴席で議論することではない」と関羽。

「わが君が小さな江東の地しか領有されておりませんのに、荊州を貸与たいよされたのは、將軍がたが戦いに敗れ遠くから逃げて来られて、身を寄せる所がなかったからです。今すでに益州えきしゆうを得られたからには、荊州を返還へんかんされて当然かと思えます。だからこそ皇叔どのはまず三郡を返すと承知されたのに、將軍が承知されないのは道理に合いません」と魯肅。

「烏林うりんの戦い（赤壁の戦い）のさいには、左將軍さしやうぐん（劉備を指す）はみずから矢石やいしを浴びながら、呉と力を合わせて敵を撃破されたのだ。寸土すんども与えられないということがあろうか。それなのに足下そつがはまたも土地を返せと言われるのか」と関羽。

「それはちがいます。將軍と皇叔はともに長坂ちやうはんの戦いに敗れ、万策ばんさく尽きて、遠方に落ちて行くこうとしておられた。わが君は皇叔どのが身の置き所もないのに同情され、領地をお与えになって、のちのちの成功の便宜べんぎを図られたのです。にもかかわらず、皇叔どのはその恩徳を無にし、蜀を手に入れながら、なおも荊州を占拠せんきよしておられる。こんな欲のために信義に背

くやりかたをされては、天下の笑いものになりましょう。どうかよくお考え下さい」と魯肅。

「これはすべて兄上のごことであり、私の関与することではない」と関羽。

「將軍は皇叔どのと桃園とうえんで義兄弟の契りを結ばれ、生死をともにすると誓われた仲。皇叔どのと將軍は一心同体なのに、そんな口実こうじゆは通りません」と魯肅。

関羽がまだ答えないうちに、周倉しゅうそうが庭先で声を荒げて言った。

「天下の土地は、徳の有る者が所有するのだ。おまえたち呉だけのものではないぞ」

関羽はさつと顔色を変えて立ち上がり、周倉が捧げ持っていた大刀をひったくると、庭のまんなかに立ちはだかり、周倉に目くばせしながら叱りつけた。

「これは国家の問題だ。どうしておまえが口を出すのか。さつさと出て行け」

その意味を悟った周倉が一足さきに岸辺きしべに到着し、紅旗を一振りすると、関平かんへいの船が矢のように漕こぎよせて来た。

関羽は右手で刀をひっさげ、左手で魯肅の手をしっかりと握ると、酔ったふりをして言った。

「せっかく私を宴会に招いてくれたのだから、荊州の話は持ち出さんでもらいたい。私は酔っているから、昔馴染むかしなじみの友情を台なしにするかもしれない。いずれまた貴公を荊州に招待

するから、そのとき相談しようではないか」

魯肅は生きた心地もなく、長江の岸边まで関羽に引つ張られて行った。呂蒙りよもうと甘寧かんねいは、手勢を率いて討つてようとしたが、関羽が大刀をひっさげ、魯肅の手をつかんでいるのを見ると、魯肅を傷つけることを恐れて手出しできなかつた。

関羽は船の前まで来ると、ようやく魯肅の手を離し、すばやく船首に立って魯肅に別れの挨拶をした。魯肅は惚ほうけたように、関羽の船が風に乗って遠ざかるのを眺めていた。

### (解説)

『三国志演義』は、魯肅が関羽の威容にうたれ、顔をあげることができなかつたとして、最初から関羽が魯肅を圧倒する様子を描きます。

魯肅は関羽に荊州三郡の返還を求めますが、周倉が、天下の土地は徳のある者が保つのであつて呉だけのものではないと声をあげると、関羽が周倉を叱りつけます。周倉はその意味を察し、待機していた関平かんへいの船を呼び寄せます。そこで関羽は魯肅をつかみ、そのまま船までひきずって行きます。呂蒙や甘寧も手出しができず、関羽は魯肅に別れを告げて去っていきます。「单刀赴会たんとうしうかい」の名場面です。

テレビドラマの『三国志 Three Kingdoms』では、脚色を加えて次のような展開にしています。

会見中、魯肅は立ち上がると関羽にそっと耳を近づけ、伏兵が命を狙っていること知らせます。そして、自分の手を取って盾にし、引つ張りながら逃げるよう関羽に言います。関羽は魯肅の言うとおりにして、危地を脱します。魯肅が関羽の命を助けたことにしています。

そして魯肅の恩義に感じ入った関羽が、その後、荊州三郡の返還を認めるといふ設定です。実は、魯肅は、重篤じゅうとくな病をおしてこの会見の場に来ていたのですが、関羽を見送った後ついに倒れます。魯肅は呂蒙りよもうに後事を託すると、主君の孫権への手紙を書きながら亡くなります。『三国志演義』と『三国志 Three Kingdoms』それぞれに、小説またドラマとして工夫した展開にしています。では、『三国志』の史実からみた「単刀赴会」は、どのようなものだったのでしょうか。

荊州三郡の返還を劉備が拒絶すると、孫権は軍を動かし実力で占領しようとしています。劉備は関羽を派遣してこれに対抗させたので、魯肅の呉軍とにらみ合うことになります。

そのとき魯肅は、関羽に会見を呼びかけます。それぞれ軍を百歩の距離に空け、魯肅と関羽が、それぞれ一っだけ刀を持って会見しようというものです。会見の場で、まず魯肅が次

のようにいいます。

孫権が劉備に荊州を貸し与えたのは、劉備が扱よべき領地が無く困窮こんきゆうしていたからだ。現在、劉備はすでに蜀を手に入れたのに、荊州を返還しようとしなさい。荊州の三郡だけを返還するよう求めているのに、それすら聞き入れないのかと詰め寄ります。

関羽の側にいた一人が、土地は徳がある者が領有すべきで、呉だけのものではないといい放ちます。

すると、魯肅は声を荒げて、この関羽の側近を厳しく怒鳴りつけます。

関羽も太刀を手に立ち上がり、この問題は国家に関する話であり、この者が関知することではないと言って、その者を退出させます。

魯肅は、さらに理路整然りろせいぜんと関羽に詰め寄りますが、関羽は返答することができなかつた。

そしてこの時、曹操が漢中かんちゆうに攻め込んできたので、劉備は荊州の湘水しやうすい以東の領土を呉に返還することに同意しました。

以上が『三国志』での「単刀赴会」の模様です。

『三国志演義』ですと、豪胆な関羽が小心な魯肅を圧倒する場面になっていますが、実は『三国志』で見ると、魯肅の豪胆こうたんぶりが際立ち、関羽はまともに返答できないことになって

います。これが「単刀赴会」の真実でした。

こうして、湘水以東は呉に返還されるわけですが、呉の呂蒙が「単刀赴会」の前に実力で奪い取っていた零陵れいりょうを、魯肅は劉備に再び与えています。魯肅は、複雑な心境だったでしょう。零陵も含めて荊州南部を領有したい、しかし一方で、強大な曹操と対抗するために劉備との同盟が必要。これが前にも述べた魯肅の戦略ですので、零陵を与えることで劉備に貸しをつくり、良好な同盟関係を維持しようとしたものと思われまふ。こういう複雑、立体的な戦略をたてるのができたのが魯肅なのです。

今まで何回も触れていますが、『三国志演義』は、魯肅や周瑜など呉の人物を、劉備や諸葛亮をもち上げるために不当に低く描いています。これが『三国志演義』の基調にあります。史実では、「単刀赴会」は、魯肅の外交的勝利だったのです。

ちようどそのころ都の許きょでは、篡奪さんだつの野心を次第に露あらわわにする曹操に対し、献帝の妻の伏ふく皇后きうかんが父の伏完ふくわんに連絡を取り、曹操暗殺を図ろうとします。伏完からの返答を託たくされた穆順ぼくじゆんは、頭髮にそれを隠して宮中に戻ろうとしますが、これを曹操に密告するものがあり、穆順は捕まり計画は露見してしまいます。そして、伏皇后は撲殺ぼくさつされ、伏完とその一族も皆殺しにされてしまいます。献帝は、この世にこんなことがあっていいものかと言って、嘆き悲し

むだけですが。そして曹操は、自分の娘曹貴人を皇后に立てます。『三国志演義』は、曹操の冷血ぶりをこれでもかと描きます（「伏皇后、国のために生を損てる」）。

ついで、曹操は漢中の張魯討伐に軍を進めますが、曹操軍は漢中の險阻な地形に進軍を阻まれ、また、敵の攻撃に苦戦します。そして、こうとわかつていたら漢中には来なかった、と曹操にしては珍しく弱音を吐く始末です。しかし、そこは曹操、ちゃんと作戦を考えつきません。それは、退却すると見せかけて敵を油断させ、奇襲をかけようというものです。

その時、ちよつとしたハプニングが起きます。

曹操軍の先鋒が濃霧の中で道に迷ってしまい、敵の砦の前にでてしまうという事態が起きます。しかし、それを砦の敵は味方だと思って、門を開いてしまったのです。こうして思わぬチャンスで敵の砦を占領し、敵を壊走させます。これを『三国志演義』は、曹操が退却と見せかけて敵を奇襲しようとした時のことにしていますが、実際は、曹操が漢中攻撃を諦めて退却する時のことでした。

この場面は、史実のほうが意外性が高くて面白いので、『資治通鑑』の記述に沿ってまとめると、以下の通りです。

最初、曹操は、漢中の要衝である陽平関の攻略を甘くみていました。それは事前に、陽平

関は南北の山から遠く離れていて守りようがなく、簡単に落とせますという情報を得ていたからでした。しかし、聞くとも見るとでは大違いで、来てみると陽平関はまったく異なつた險阻な地形でした。

曹操は思わずため息をついて、「他人の見方と言うのは、自分の考えとは随分異なるものだ」と弱音をはきます。そして、陽平山の各城に進撃しますが、山は険しくて登ることはできません。兵の死傷は多く、糧秣も尽きそうになります。曹操は意気阻喪し、山からの通路を断つて、撤退しようとしています。そこで、すでに山に登つていつた部隊を呼び戻すよう命じます。しかし、先の部隊は夜になつて道を見失い、知らないうちに敵の陣営に入りこんでしまったのです。夜に突然紛れ込んできた曹操軍に、敵軍はビックリ仰天して遁走します。このことを、直ちに本隊に知らせます。

「我が軍はすでに敵の拠点を攻め落とし、敵軍は敗走しました」と。

以上が、史実から見た顛末です。諦めて退却するつもりが、とんだ怪我の功名でした。

次いで曹操は、張魯の根拠地である南鄭の攻撃に向かいます。張魯は、食糧庫や府庫は国家のものだから灰にしてはならないと言つて、施錠したうえで巴中に脱出します。こうして漢中は、曹操の領有に帰します。

このとき、参謀の司馬懿しばいが進言しんげんします、「劉備は詐術さじゆつで劉璋の領土を奪い取ったので、蜀の人々はまだ心から従つてはおりません。またとない機会です。すみやかに軍勢を進めたならば、蜀は必ず崩解します。時の流れに乗ずるべきです。この機を逃してはなりません」と。

そのとき、曹操は、後漢の劉秀りゅうしゅうの名文句「隴を得て蜀を望む」に重ねて、自らの感慨かんがいを言います。

「人は足るを知らざるに苦しむ。既に隴ろうを得て、復た蜀を望まんや」

人の欲望には限りがないものだ、と曹操はため息をつきながら言い、夏侯淵かこうえんと張郃ちやうかくを漢中に残して帰還の途につきます。